

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 1/10 )

学部・学科	臨床心理学部・臨床心理学科	職名	准教授	氏名	松 田 眞 理 子
学歴	昭和57年 3月 早稲田大学第一文学部日本文学専攻 卒業 平成12年 3月 京都文教大学人間学部臨床心理学科 卒業 平成14年 3月 京都文教大学大学院臨床心理学研究科 ( 博士前期課程 ) 臨床心理学専攻 修了 平成17年 3月 京都文教大学大学院臨床心理学研究科 ( 博士後期課程 ) 臨床心理学専攻 修了				
学位	平成17年 3月 臨床心理学博士 ( 京都文教大学 博甲第一号 )				
専門分野	臨床心理学				
専門資格	財団法人日本臨床心理士資格認定協会 臨床心理士 ( 登録番号第10223号 ) 高等学校教諭1種免許 ( 国語 ) 平8高1第513号 中学校教諭1種免許 ( 国語 ) 平8中 1 第415号				
所属学会	平成12年 4月 日本心理臨床学会 平成13年 4月 日本心身医学学会 平成14年 4月 日本精神神経学会 日本ユング心理学研究所 ( AJAJ ) 平成14年 9月 日本箱庭療法学会 平成17年12月 日本芸術療法学会 平成18年 5月 日本サイコオンコロジー学会 平成20年 3月 日本精神障害予防研究会 ( 平成21年度より日本精神保健・予防学会に名称変更 ) 平成20年 8月 The International Early Psychosis Association Inc 国際早期精神病学学会 平成20年10月 日本統合医療学会 平成21年 1月 日本統合失調症学会 平成21年 4月 日本精神病理・精神療法学会 平成23年 5月 日本病跡学会 平成23年10月 精神医学史学会 平成26年 6月 日本ユング心理学会 ( AJAP )				
受賞	平成16年 9月 日本心理臨床学会 奨励賞受賞				
担当授業科目	学 部 医療心理学、精神科リハビリテーション学A・B、臨床心理学基礎演習、臨床心理学演習、臨床心理学研究法演習 ・ 、臨床心理学総合演習 ・ 、臨床心理学実践演習 ( 芸術療法1 ) 春・秋、臨床コミュニケーション論 ( オムニバス形式 ) 春、臨床コミュニケーション論 ( オムニバス形式 ) 秋、卒業論文 ----- 大学院 臨床心理学特演 -A・ -B、臨床心理学特演 -A・ -B、臨床心理学研究法特演 -B・ -B、心理療法特演 -A・ -A、臨床心理学学外実習 -A・ -B				
論文指導	論文指導担当 [ 主査 ] ( 卒論 : 17名、修論 : 3名 ) 論文審査担当 [ 副査 ] ( 卒論 : 2名、修論 : 4名 )				

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (2/10)

F D 活 動 ・ 教 育 実 績	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%;">科目名 医療心理学</td> <td style="width: 33%;">科目カテゴリー 講義・演習・実習・実験</td> <td style="width: 17%;">実施学期 春・秋</td> <td style="width: 17%;">履修者数 約 160 名</td> </tr> </table>	科目名 医療心理学	科目カテゴリー 講義・演習・実習・実験	実施学期 春・秋	履修者数 約 160 名
	科目名 医療心理学	科目カテゴリー 講義・演習・実習・実験	実施学期 春・秋	履修者数 約 160 名	
	<p>授業の概要： 西洋医学の歴史は「医学の父」と仰がれた紀元前 5 世紀のギリシャのヒポクラテス (Hippocrates) をもって嚆矢とし、古代より様々な療法が案出され、現代に至っており、本講義では最初に医療の歴史と精神医学の歴史を概観し、医療心理学に対する視座を開いていく。また心と身体の間接的に対する理解を深め、「痛み」の意味を考え、医療現場における心理療法的アプローチの実際を見ていく。心理療法が必要とされるのは、精神科や心療内科のみではなく、脳や臓器、四肢、骨など身体が多岐に亘る手術に関わる外科や整形外科、アトピーや火傷など皮膚疾患に関する皮膚科や形成外科、出産の喜びだけではなくマタニティブルー、死産や障害を持ったこどもの誕生、不妊、墮胎、など喜びと悲しみが混在する産婦人科、こどもの病気や ADHD をはじめとする発達障害などに関わる小児科など、医療現場におけるほぼ全ての領域であると言っても過言ではない。さらに、感染症や臓器移植、認知症、ターミナルケア、再生医療など様々な課題に対する理解を深めて行き、人間が「病む」、あるいは「治る」ということについての意味を深く捉えていく姿勢を養っていくことを目的とする。</p>				
<p>1 教育活動の振り返り： 人間存在や病や死、回復するという意味について精神医学的、臨床心理学的、精神保健学的側面からの理解について講義し、講義終了時に毎回、講義内容に関する質問や自分の意見を提出してもらい、次回講義の最初に質問に対する答えや受講生全体で共有することが望ましいと筆者が判断した意見を紹介した。よって受け身的な講義ではなく、教員と学生が意見交換を行うことで、学生の講義に対する積極的姿勢を促した。必要に応じてビデオやDVD、OHPを使用し、視聴覚的側面からの理解も促した。 教育活動の成果： 「授業をよりよくするためのアンケート」結果を元に履修している学生がより講義内容に深い興味関心を抱き、学ぶ内容が将来の職業や日常生活の中で生かすことができるような広い視野を育むことにも努めた。 今後の課題： 再生医療や出生前診断など、医学の進歩は難病や先天性疾患で苦しむ人々にとっての福音であると同時に人間が踏み越えてはならない倫理の問題を常に我々に突きつけてきている。医療現場の光と影の両面を臨床心理学的視点から深く考察し、受講生に伝えていくことが今後の課題の1つである。</p>					
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%;">科目名 臨床心理学実践演習(芸術療法)</td> <td style="width: 33%;">科目カテゴリー 講義・演習・実習・実験</td> <td style="width: 17%;">実施学期 春・秋</td> <td style="width: 17%;">履修者数 26名</td> </tr> </table>	科目名 臨床心理学実践演習(芸術療法)	科目カテゴリー 講義・演習・実習・実験	実施学期 春・秋	履修者数 26名	
科目名 臨床心理学実践演習(芸術療法)	科目カテゴリー 講義・演習・実習・実験	実施学期 春・秋	履修者数 26名		
<p>授業の概要：2名の大学院生をTAとして、風景構成法や星と波テスト、ワルテック描画テスト、なぐり描き法、相互なぐり描き法、丸と家族画法、動的家族画法、九分割統合合法などの描画やコーラージュ療法を主とする芸術療法を施行した。</p>					
<p>2 教育活動の振り返り： 芸術療法は、無意識を賦活させ、心の深層が活性化されることが多いが、臨床実践を行うことの経験の重さを受講生やTAもしっかりと受け止め、将来、臨床現場で働く可能性のある人達はもちろんのこと、一般就職をする学生達にとっても大事な経験として今後の日々の対人関係の中で役立てることに繋がったと思われる。 教育活動の成果： TAを担当してくれた大学院生達にとっても、芸術療法を実践することにより、いかに無意識が賦活し、心の深層が活性化されるかということを実践している学生達を見守る中で如実に感じ取る体験ができたと思われる。TAが学生達への演習サポートを過不足なく行うための適切な距離感や客観性、迅速で適切な対応を如何に行うかなどその場の状況に応じて臨機応変に判断する力も培われたものと思われる。 今後の課題： 丸と家族画法や動的家族画法を実践の中に取り入れているが、受講生の中には家族関係に課題をもつ者もあり、実践演習を通して自らの家族関係を見つめることが苦悩に繋がる場合も見受けられる。実践演習を通して自らの課題に気づき、将来、臨床家として臨床現場に立つ際に被験者への深い配慮を培うことに学びをつなげていってもらうための配慮と工夫が課題である。</p>					

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (3/10)

	<p>・学内外のFD関連講演会/セミナー等への参加実績</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>平成26年10月30日 京都文教大学 第1回FD講演会 手島英貴先生ご講演「京都文教大学の初年次教育を考える ~ジェネリック・スキルを育てるための科目間連携~」に参加した。前半は手島先生によるジェネリック・スキル基本情報や大学教育におけるジェネリック・スキルの講演であった。後半、6人1組のグループに分かれ、京都文教大学初年次におけるジェネリック・スキル育成のアイデア探しについてディスカッションし、最後は各グループの代表者がディスカッション内容を発表し、参加者全員でアイデアを共有した。</li> <li>平成27年3月25日 京都文教大学 第2回FD講演会 帝京大学高等教育開発センターの井上史子先生ご講演「授業と評価をつなぐ為に ~ルーブリック評価入門~」に参加した。前半は井上先生によるルーブリック評価についての講演であった。後半、6人1組のグループに分かれ、最初は個人で作成例をもとにルーブリックを検討し、その後、グループのメンバー全体で修正点や気付きなどを話し合い、最後は3つのグループの代表者がディスカッション内容を発表し、参加者全員でアイデアを共有した。</li> </ol>
<p>F D 活 動 ・ 教 育 実 績</p>	<p>・教育効果が高い、あるいは教育の一環として行われている課外活動等</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>平成18年度の卒業論文ゼミ生以降、ゼミ生全員の承諾を得て、松田ゼミの卒業論文集を作成し、卒業時に卒業生に論文集を配布している。さらに卒業する4回生の許可を得た上で、松田ゼミに所属する3回生全員に卒業論文集を配布し、3回生が4回生になった時の卒業論文作成における実質的な参考資料として活用してもらっている。</li> <li>PSW委員としてPSW実習先(京都民医連第二中央病院ダイケアセンター、京都醍醐病院ダイケアセンター)に実習生を同伴し、事前訪問を行った。そして実習期間中に実習生の実習経過に関して、中間訪問を行い、受け入れ先の実習担当者に実習状況の具体的な問い合わせをし、実習状況の把握を行った。そして事後訪問では実習受け入れ先の実習担当者から今後の実習に関する改善点を伺い、次年度の実習生受け入れ枠の確保・増大などに努めた。</li> <li>正規授業時間外で1回生~4回生を対象とした多岐に亘る学生相談や学生指導を随時行った。具体的には卒業論文作成に関する指導や助言、卒業論文調査依頼先に関する助言や調査依頼書類作成指導、大学院進学希望者の大学院受験対策や大学院における研究計画書作成に関する具体的指導、大学院受験のための推薦書作成、専門学校受験(医療・看護系)指導などを行った。</li> <li>心身の不調による休学・退学などに関する相談に随時応じ、学生課や健康管理センター、学生相談室との連携を行った。また復学者面接においては、安心して復学できるような具体的アドバイスを行った。</li> <li>大学院修士課程修了生の日本臨床心理士資格認定協会による臨床心理士資格受験対策の一環として、平成26年9月10日に受験生を対象とした小論文受験対策講座を開催し、過去16年間の試験問題データをもとに具体的な対策について論じ、受講生からの質疑応答にも応じた。</li> <li>大学院修了生、研究生の就職活動における履歴書の書き方の指導、推薦書の作成ならびに採用面接に関する助言を適宜行い、採用内定に至るまで支援した。</li> <li>平成26年11月2日に高槻病院精神科部長の杉林稔先生が開催された記述臨床研究会に大学院生5名を帯同し、多くの精神科医や看護師、作業療法士など臨床実践に携わる専門家による研究会に参加することで、精神科臨床における実践的知見を深め、人的交流を広げることを支援した。</li> </ol>
<p>H26 年度 研究課題</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>アットリスク精神状態群に対する精神病顕在発症を予防する心理的面接法の開発</li> <li>アットリスク精神状態群(精神病発症危険群)の未治療期間(Duration of Untreated Psychosis; DUP 以下DUPとする。)を短縮させるための心理療法的面接法の開発</li> <li>日本画家・杉山寧の病跡学的検討</li> </ol>
<p>年 度 の 研 究 活 動 の 概 要  平 成 二 六 (2014)</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>筆者は私立高等学校のスクールカウンセラーとしての立場から学校臨床におけるアットリスク精神状態群(精神病発症危険群)に対し精神病の顕在発症の予防を目指した心理療法の開発を継続して研究している。その一環として、精神病顕在発症を予防するための早期介入の推進のためには精神病未治療期間(duration of untreated psychosis: DUP)が長くなる要因と、DUP短縮のための工夫点を生徒本人の病前性格、精神科受診に対する本人と両親・関係各者の捉え方、精神疾患に対する理解度の向上、治療意欲の継続、医療機関との協力関係の形成能力育成も視野に入れた観点から見出し、それらを心理面接の中に導入することを検討した。また、</li> </ol>

アットリスク精神状態群と同定され、精神科受診に至った場合でも、主治医に協力を依頼し、拙速に薬物投与を行うのではなく、外来レベルの非精神病性の気分障害（軽度・中等度うつ病性障害、気分変調性障害、双極型障害、抑うつ気分を伴う適応障害）に対しては、良質な睡眠確保を中心とした生活改善の指導を行ってもらっている。この場合、睡眠は生理学的にみても単なる「休息」ではなく「建設」であり、抑うつ状態に対しては「治療」そのものであると考え、睡眠の絶対量確保による生活サイクルの改善によって精神的不調からの回復ならびに、精神病顕在発症の予防を目指している。

- 2-1. 本研究において、平成25年度～27年度にかけて科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金（基盤研究C）「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発」の研究代表者として採択された。後述：（学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含）

この研究は平成19年度から21年度にかけて科学研究費補助金基盤研究C（課題番号：19530638）「アットリスク精神状態群（ARMS）に対する精神病顕在発症を予防する心理的面接法の開発」の研究代表者として遂行した研究の継続版である。平成25年5月から7月にかけて小林・宇野・水野（2007）によるPRIME-Screen日本語版を配布し、リスク陽性の有無を同定するために質問紙への回答を求めたところ、男子137名（18歳～25歳、平均19.3歳）女子243名（18歳～36歳、平均19.4歳）合計380名（平均19.3歳）から回答を得た。さらに半構造化面接に応じると回答してくれた45名の中からリスク陽性度の高い3名に対し夏から秋にかけて、半構造化面接ならびに描画（バウムテストと風景構成法）を施行した。

今回の調査ではリスク陽性を示した被験者が40.5%であった。小林・水野（2010）は115例の精神科診療所初診患者にPRIME-Screenを施行した結果、46例（40%）がリスク陽性の基準に該当し、そのうち19例がSIPSで発症リスク状態と判断したと報告している。本調査は一般大学生を対象としたが、リスク陽性者の割合が精神科診療所初診患者とほぼ同等であったことは着目に値すると考えられるが精査が必要である。なお、本調査は「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発 リスク陽性者を半構造化面接と投映法から検討する」というタイトルで、日本心理臨床学会第33回秋季大会（平成26年8月24日）にて、連携研究者・山路有紀（京都文教大学学生相談室）と共にポスター発表をした。後述：（学会報告、学会活動）学会発表（国内）2

- 2-2. 同じく前述の科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金による研究活動の一環として昨年度施行したPRIME-Screen日本語版による調査を平成26年度も大学生を対象に施行し、リスク陽性者を抽出し、さらに半構造化面接に応じた被験者の有する前駆症状の内容と自我機能を把握することを試みた。大学生を対象に平成26年5月にPRIME-Screen日本語版を講義中に配布し、リスク陽性の有無を同定するために質問紙への回答を求めた。その結果、男子32名（平均22.5歳）女子103名（平均20歳）合計135名（平均21.1歳）から回答を得た。調査対象者135名中、PRIME-Screen日本語版のリスク陽性値を満たす者は29名（調査対象者全体の21.4%）であり、うち男性8名（男性全体の25%）、女性21名（女性全体の15.6%）であった。その内訳は「合計点が39点以上」14名（男性5名、女性9名）、「1年以上のスコア6が1つ以上」8名（男性0名、女性8名）、「期間によらないスコア6が2つ以上ある」0名、「1年以上のスコア5が2つ以上ある」7名（男性3名、女性4名）であった。リスク陽性者29名のうち、半構造化面接について本人の同意を得ることができた者は14名おり、そのうちの10名に平成26年6月～9月にかけて半構造化面接とバウムテスト、風景構成法を行った。半構造化面接から症状の詳細な内容、調査対象者の生育歴、病前性格、生活習慣、社会適応能力、バウムテストやLMTからは自我機能や現実検討能力の観点から臨床像を検討し、DUP短縮につなげる工夫点の一助にすることとした。本調査の結果を9th International Conference on IEPA（The International Early Psychosis Association Inc）国際早期精神病学会第9回大会（平成26年11月17日～19日）においてポスター演題発表した。後述：（学会報告、学会活動）学会発表（海外）1

3. 明治・大正・昭和を生きた著名な日本画家・杉山寧について生育歴、作品を主軸として病跡学的検討を加えた。杉山は東京美術学校在学中から頭角を表し、画家としての輝かしい一歩を踏み出したが、30代の約10年間は結核闘病に潰え、さらに娘婿が三島由紀夫であったため、三島の自決はその後の杉山の生き方に少なからず影響を及ぼしたと考えられた。杉山の作品には生涯を通じて永遠なるものへの希求が見られるが、同時に彼には「乾いたものへの希求」が併存していた。芸術家が永遠なるものへの希求に自分の生涯を捧げることは、決して珍しいことではないが、「乾

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (5/10)

概要 平成二十六年(2014)年度の研究活動の概況	いたもの、乾いた大地」への希求は杉山独特の精神構造が影響していると考えられる。よって「永遠なるもの」と「乾き」への希求の両側面を検討し、杉山が日本画を通して探求し続けたものを中心に、敗戦、結核闘病、三島自決による影響も絡めながら検討し、「杉山寧 乾いたものへの希求」というタイトルで日本病跡学会第61回大会(平成26年7月12日)発表した。さらに最新精神医学編集部による依頼原稿として「杉山寧:「永遠なるもの」と「乾いたもの」への希求」を執筆した。後述:(学会報告、学会活動)学会発表(国内)1,(論文)1
平成二十六年(2014)年度の主な研究成果等	(著書) (論文) 1. 「杉山寧:「永遠なるもの」と「乾いたもの」への希求」、単著、平成26年11月、世論時報社、最新精神医学19巻6号 特集「画家の病跡」(pp.463-471) 2. 「青木繁 神話的時間を生きたひとりの画家」、単著、平成26年12月、日本病跡学会 日本病跡学雑誌88号 (pp.50-62) 3. 「Freud,S. 『真理と正義に生きる至高の理念』の体現者」、単著、平成26年12月、日本精神病理学会 臨床精神病理第35巻第03号 (pp.271-281) (学会報告、学会活動) 学会発表(海外): 1. “Effectiveness of psychotherapy for At Risk Mental State (ARMS) in preventing full blown psychosis —through the view point of -impulse-control and cognitive function—” 9th International Conference on IEPA in Tokyo( The International Early Psychosis Association Inc ) (ポスター演題発表) 共同、平成26年11月、共同発表者:生田孝(名古屋市立大学医学部臨床教授・聖隷浜松病院精神科)・山路有紀(京都文教大学学生相談室)・高島朋子(ヘルスアンドウェーブ株式会社)・周直民(京都大学医学部精神神経科)、国際早期精神病学学会第9回大会、東京 学会発表(国内): 1. 「杉山寧 乾いたものへの希求」、単独、平成26年7月、第61回日本病跡学会総会、東京慈恵会医科大学 2. 「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発 リスク陽性者を半構造化面接と投映法から検討する」、共同、平成26年8月、共同発表者:山路有紀、日本心理臨床学会第33回秋季大会、パシフィコ横浜 (その他、エッセイ・翻訳・学術講演等) 1. 「[座談会]ヌミノース体験の世界を語る 前編」、共同、平成26年9月、座談会:山中康裕・松田真理子・中島祐子・杉林稔、統合失調症のひろば 2014年秋号通巻4号(pp.82-102) 2. 「粘土での表現を行った中学生女子との面接過程 海の世界から陸の世界、そして人を作ったプロセス」(司会)平成26年10月、発表者:新居晴香、指定討論者:横山剛、日本箱庭療法学会第28回大会、東洋英和女学院大学 3. 「[座談会]ヌミノース体験の世界を語る 後編」、共同、平成27年3月、座談会:山中康裕・松田真理子・中島祐子・杉林稔、統合失調症のひろば 2015年春号通巻5号(pp.128-136) (調査活動) 1. 「統合失調症者のヌミノース体験に関する研究」「統合失調症者の幻覚妄想体験に関する研究」についての調査:小阪病院 精神科(大阪府)「平13.7より」 2. 「統合失調症者のヌミノース体験に関する研究」「統合失調症者の幻覚妄想体験に関する研究」「慢性期の統合失調症者の心理療法における建設的視座」についての調査:阪本病院 精神科(大阪府)「平13.8より」 慢性期の統合失調症者を対象とする心理療法を主治医との連携のもとで定期的な1回につき1時間の枠で行っている。1時間の枠の中で言語的心理療法を約50分施行し、患者の疲労度などを加味しつつ、患者の協力があれば、バウムテストと星と波テストを行っている。これは言語的に患者が表出するものと、描画という非言語的表出法によって表現される患者の深層にも視点を向け、統合失調症者の心理療法における建設的視座を見出ししていくためである。:阪本病院 精神科(大阪府)

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (6/10)

<p>平成二十六(2014)年度の主な研究成果等</p>	<p>(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含) 平成25年度-平成27年度 科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金(基盤研究C)「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発」(課題番号25380962)研究代表者(連携研究者:山路有紀、研究協力者:生田孝)</p> <p>(学内活動) 臨床心理学部研究報告編集委員会委員長、入試委員会委員長、入試実行委員会委員、PSW委員会委員</p>
<p>平成二十六(2014)年度の社会における活動</p>	<p>(自治体、行政等 官公庁からの委託事業や委員の囑託) 平成26年 8月 平成26年度夏期教員免許状更新講習講師(共同:平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於:京都文教大学 平成26年11月 平成26年度秋期教員免許状更新講習講師(共同:平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於:京都文教大学</p> <p>(小中高との連携授業の講師) 平成26年 4月・5月・6月 上宮高等学校 春スクーリング、課題提出及び面談(共同:濱野清志・松田真理子)、於:京都文教大学 平成26年 8月 上宮高等学校 第1回夏期スクーリング、「童話『100万回生きたねこ』から読みとく臨床心理学について」、於:京都文教大学 平成26年10月 京都の大学『学び』フォーラム2014 模擬講義「臨床心理学とは何か 様々な視点から考える」於:同志社大学 今出川キャンパス 良心館</p> <p>(その他) ・同志社高等学校 スクールカウンセラー「平14.5より」 ・株式会社オリックス 心理カウンセラー「平18.10より」 ・阪本病院 心理カウンセラー「平19.1より」</p> <p>平成26年 5月 平成26年度京都文教公開講座「京都文教教養講座」・臨床心理学部テーマ:「心・体・命」講師、「臨床心理学の視点から考える生命倫理について」、於:京都文教大学 平成26年 6月・8月・9月 京都文教大学オープンキャンパス 学科説明会講師、於:京都文教大学</p>
<p>平成二十一〜二十五(2009〜2013)年度の主な研究成果等</p>	<p>(著書) 1. 『統合失調症と宗教 医療心理学とウイトゲンシュタイン』、共著、平成22年1月、創元社、共著者:星川啓慈、304p 2. 「フロイト対ユング 宗教に対する態度」、共著、平成22年3月、ナツメ社、編著者:山中康裕、心理学対決!フロイト対ユング(pp.114-117)</p> <p>(論文) 1. 「秩序について 人間の発達過程と発症過程、カフカの『審判』からみた秩序」、単著、平成21年6月、心理臨床学研究27巻2号(pp.174-183) 2. 「加藤真砂美論文へのコメント 「奪うもの」であり「守るもの」である「病」の両側面」、単著、平成22年3月、神戸女学院大学大学院心理相談紀要第11号(pp.76-79) 3. 「医療心理学を通じて培うもの」(報告)、単著、平成22年3月、京都文教大学 臨床心理学部研究報告第2集(pp.167-177) 4. 「マリアとブラックマリア 処女性と大地母神」、単著、平成24年3月、京都文教大学心理臨床センター 臨床心理研究第14号(pp.65-75)</p>

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (7/10)

(論文 つづき)

5. 「大橋頌子氏論文へのコメント 「合わせ鏡」のような高齢者夫婦の事例」、単著、平成24年3月、神戸女学院大学大学院心理相談紀要第13号 (pp.140-144)
6. 「At risk mental State(ARMS)において精神病顕在発症を予防するための臨床心理学的面接法の検討」、単著、平成25年3月、京都文教大学心理臨床センター 臨床心理研究第15号
7. 「福田たね 生命力にあふれた現実的非凡」、単著、平成25年3月、京都文教大学 臨床心理学部研究報告第5集 (pp.57-71)
8. 「『もじゃもじゃペーター』の作者である精神科医ハインリッヒ・ホフマンについて」、共著、平成25年10月、共著者：生田孝、日本精神医学史学会 精神医学史研究Vol.17 2 (pp.61-73)
9. 「20代女性との面接過程 双極 型障害か人格障害か 心理面接からの視座」、単著、平成26年3月、京都文教大学心理臨床センター 臨床心理研究第16号 (pp.121-130)
10. 「杉山寧 「永遠なるもの」と「乾いたもの」への希求」、単著、平成26年3月、京都文教大学 臨床心理学部研究報告第6集 (pp.87-101)
11. 「陶山由季子氏論文へのコメント 抜毛と脱毛を主訴とした5歳男児とのプレイセラピー」、単著、平成26年3月、神戸女学院大学大学院心理相談紀要第15号 (pp.118-121)

(学会報告、学会活動)

学会発表 (海外):

1. “ Effectiveness of psychotherapy for At Risk Mental State (ARMS) in preventing full blown psychosis through the view point of -impulse-control and cognitive function ” 7<sup>th</sup> International Conference on IEPA in Amsterdam( The International Early Psychosis Association Inc )(ポスター演題発表)、共同、平成22年11月、共同発表者：生田孝 (名古屋市立大学医学部 臨床教授・聖隷浜松病院精神科)、国際早期精神病学会第7回大会、アムステルダム (オランダ)

学会発表等 (国内):

1. 第105回日本精神神経学会学術総会 (参加)、平成21年8月、神戸国際会議場
2. 日本精神病理・精神療学会第32回大会 (参加)、平成21年9月、いわて県民情報交流センター (アイーナ)
3. 国際箱庭療学会第20回大会 (準備委員：受付・クローク担当)、平成21年11月、佛教大学および京都国際会館
4. 第13回日本精神保健・予防学会 (参加)、平成21年11月、全国社会福祉協議会・灘尾ホール (新霞ヶ関ビル1階)
5. 第9回河合臨床哲学シンポジウム (参加)、平成21年12月、中央大学駿河台記念館
6. 2009 / 2010日本精神病理コロック (愛知医科大学精神神経学教室主宰) (参加)、平成22年2月、名古屋市サンプラザシーズンズ
7. 群星心理学研究会第3回特別研集会 (参加)、平成22年3月、てるてるホール (沖縄ウィメンズメンタルクリニックみなみ内)
8. 日本統合失調症学会第5回大会 (参加)、平成22年3月、九州大学医学部百年講堂
9. 「Freud,S.とJung,C.G.の宗教に対する態度の検討」、単独、平成22年10月、日本精神病理・精神療学会第33回大会、東洋大学白山キャンパス
10. 「『もじゃもじゃペーター』とハインリッヒ・ホフマン」、共同、平成22年10月、共同発表者：生田孝、日本精神病理・精神療学会第33回大会、東洋大学白山キャンパス
11. シンポジウム演題「未治療期間はどのように長くなるのか：DUPの短縮に向けて 学校現場における医療機関との連携の現状 スクールカウンセラーの立場から」、単独、平成22年12月、第14回日本精神保健・予防学会、全国社会福祉協議会・灘尾ホール (新霞ヶ関ビル1階)

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (8/10)

平成二十一～二十五 (2009～2013) 年度の主な研究成果等

(学会報告、学会活動 つづき)

12. 「青木繁 神話的時間を生きたひとりの画家」、単独、平成23年6月、日本病跡学会第58回大会、栃木県総合文化センター
13. 「夢を通し自らのスピリチュアリティへの扉を開いた中年期女性」、単独、平成23年9月、日本スピリチュアルケア学会第4回学術大会、兵庫県看護協会会館
14. 「マリアとブラックマリア 処女性と大地母神」、単独、平成23年10月、第34回日本精神病理・精神療法学会、名古屋大学東山キャンパス
15. 「『もじゃもじゃペーター』の作者であるハインリッヒ・ホフマンについて」、共同、平成23年10月、共同発表者：生田孝、第15回精神医学史学会、愛知県立大学長久手キャンパス
16. 「福田たね 生命力にあふれた現実的非凡」、単独、平成24年6月、日本病跡学会第59回大会、東京藝術大学
17. 第31回日本心理臨床学会秋期大会(参加)、平成24年9月、愛知学院大学
18. 「20代女性との面接過程 双極 型障害か人格障害か Comorbidityからの視座」、単独、平成24年10月、第35回日本精神病理・精神療法学会、九州大学医学部百年講堂
19. 「内的な生体験としての夢 夢の解釈と理解を通じたクライアントの内的な生の展開」(指定討論者)、平成24年10月、発表者：別宮幸徳、司会：坂田浩之、日本箱庭療法学会第26回大会、米子コンベンションセンター
20. 京都大学主催：2012年日本精神病理コロック(参加)、平成25年1月、京大時計台国際交流ホール
21. 「杉山寧 永遠なるものへの希求」、単独、平成25年7月、日本病跡学会第60回大会、大阪国際会議場
22. 「激しい身体化を伴う中年期女性の変容過程 夢分析とスピリチュアリティの観点からの検討」、単独、平成25年8月、日本心理臨床学会第32回秋季大会、パシフィコ横浜
23. 「ジェンダーコンシャスなアプローチ(8) 精神力動的心理療法にみるジェンダー 「分析心理学の視点からセクシャリティと聖性について」」、単独、平成25年8月、日本心理臨床学会第32回秋季大会、自主シンポジウム企画者・司会者：中村このゆ(追手門学院大学) 話題提供者・葛西真記子(鳴門教育大学)・松田真理子(京都文教大学)・田中誉樹(京都ノートルダム女子大学)、パシフィコ横浜
24. 「一人になれない女性との面接過程」(司会)、平成25年10月、発表者：宮澤淳慈、指定討論者：足立正道、日本箱庭療法学会第27回大会、大阪府立大学
25. 「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発 リスク陽性者を半構造化面接と投射法から検討する」、共同、平成25年11月、共同発表者：生田孝・山路友紀、第17回日本精神保健・予防学会学術集会、東京学術総合センター
26. 「『自分がない』と語る20代半ば女性の面接経過」(指定討論者)、平成26年3月、発表者：倉橋佑一、関西国際大学大学院宿泊研修会、コープこうべ共同学苑

(その他、エッセイ・翻訳・学術講演等)

学術講演：

1. 「先端医療の功罪」、平成23年6月、ITC (International Training in Communication) 第29回日本リージョン年次大会 教育セッション(受講対象はITC会員200名)、神戸ポートピアホテル

事例発表：

1. 「20代女性クライアントとの面接過程 双極 型障害か人格障害か Comorbidityからの視座」、単独、平成23年8月、京都大学医学部事例検討会、京大時計台会館

教育教材(DVD作成)：

1. 「第5巻 宗教とスピリチュアリティ」、共同制作、平成25年12月、株式会社医学映像教育センター、企画者：滝口俊子、共同制作者：島蘭進、『スピリチュアルケアを学ぶ』

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (9/10)

平成二十一～二十五(2009～2013)年度の主な研究成果等	<p>(調査活動)</p> <p>平成13年 7月 「統合失調症者のヌミノース体験に関する研究」「統合失調症者の幻覚妄想体験に関する研究」についての調査：小阪病院 精神科(大阪府)「現在に至る」</p> <p>平成13年 8月 「統合失調症者のヌミノース体験に関する研究」「統合失調症者の幻覚妄想体験に関する研究」「慢性期の統合失調症者の心理療法における建設的視座」についての調査：阪本病院 精神科(大阪府)「現在に至る」</p> <p>* 調査方法については、「平成26(2014)年度の主な研究成果等(調査活動)」に記載のとおり。</p>
	<p>(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含)</p> <p>平成19年度-平成21年度 科学研究費補助金(基盤研究C)「アットリスク精神状態群に対する精神病顕在発症を予防する心理的面接法の開発」(課題番号40411318) 研究代表者</p>
	<p>(学内活動)</p> <p>平成17年 5月 PSW委員会委員「現在に至る」</p> <p>平成20年 4月 学生委員会委員「平24.3まで」</p> <p>平成21年 4月 プラバー奨学金委員会委員「平22.3まで」</p> <p>平成22年 4月 自己点検・評価委員会 学生サービス専門委員会委員「平24.3まで」</p> <p>平成24年 4月 入試実行委員会委員「現在に至る」 入試委員会委員「現在に至る」(委員長「平26.4-現在に至る」)</p>
平成二十一～二十五(2009～2013)年度の社会における活動	<p>(自治体、行政等 官公庁からの委託事業や委員の嘱託)</p> <p>平成22年11月 平成22年度秋期教員免許状更新講習講師(共同：平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於：京都文教大学 (筆者は講義1「子どもの発達課題と心の不調」、講義2「学校現場における課題と具体的対応」を担当)</p> <p>平成23年 7月 平成23年度夏期教員免許状更新講習講師(共同：平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於：京都文教大学 (筆者は講義1「子どもの発達課題と心の不調」、講義2「学校現場における課題と具体的対応」を担当)</p> <p>平成23年11月 平成23年度冬期教員免許状更新講習講師(共同：平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於：京都文教大学 (筆者は講義1「子どもの発達課題と心の不調」、講義2「学校現場における課題と具体的対応」を担当)</p> <p>平成24年 1月 宇治市不登校問題対策委員会「小学校高学年女子児童の拒食事例」スーパーバイザー、平成23年度第3回事例研究セミナー、於：宇治市生涯学習センター</p> <p>平成24年 8月 平成24年度夏期教員免許状更新講習講師(共同：平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於：京都文教大学 (筆者は講義1「子どもの発達課題と心の不調」、講義2「学校現場における課題と具体的対応」を担当)</p> <p>平成24年11月 平成24年度秋期教員免許状更新講習講師(共同：平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於：京都文教大学 (筆者は講義1「子どもの発達課題と心の不調」、講義2「学校現場における課題と具体的対応」を担当)</p> <p>平成25年 7月 平成25年度夏期教員免許状更新講習講師(共同：平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於：京都文教大学 (筆者は講義1「子どもの発達課題と心の不調」、講義2「学校現場における課題と具体的対応」を担当)</p> <p>平成25年11月 平成25年度冬期教員免許状更新講習講師(共同：平尾和之・松田真理子)「教師と子どものためのメンタルヘルス」、於：京都文教大学 (筆者は講義1「子どもの発達課題と心の不調」、講義2「学校現場における課題と具体的対応」を担当)</p>

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 10/10 )

( 小中高との連携授業の講師 )

- 平成22年 8月 2010年度京都文教大学夏期オープンキャンパス講演講師「童話『100万回生きたねこ』から読みとく臨床心理学について」( 高大連携上宮高校夏期スクーリング )、於：京都文教大学
- 平成22年10月 京都府立鳥羽高等学校 職業別体験授業講演講師「臨床心理学とは何か」、於：京都府立鳥羽高等学校
- 平成23年10月 京都府立鳥羽高等学校 職業別体験授業講演「臨床心理学とは何か」、於：京都府立鳥羽高等学校

( 自治体や企業における研修等の講師 )

- 平成21年 6月 1. 同志社高等学校人権同和委員会研修会 教職員対象講演「高校時代とはどういう時代か 高校生を支える教職員のあり方」、於：同志社高等学校  
2. キャリアカウンセリング研究会主催キャリアカウンセリング講座「産業メンタルヘルスについて」、於：渡辺リクルートビル( 大阪 )
- 平成22年 3月 ITC ( International Training in Communication ) 主催研修会講演「『聴く』ことの意味と目的」、於：同志社大学新島会館
- 平成22年 6月 キワニス研修会講演講師「痛みとは何か」、於：西宮市小池邸
- 平成23年 9月・10月 公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構 学術交流センター平成23年度「ひょうご講座2011」講師、「描画や夢を通して知る、私の知らない私、私の無意識の世界」、於：兵庫県民会館
- 平成24年 6月 ITC ( International Training in Communication ) 姫路年次大会 教育セッション講演「私の好きなもの、好きなこと」、於：姫路護国神社会館
- 平成24年 8月 2012年度京都文教大学夏期オープンキャンパス講演「マザー・テレサによる「死にゆく人々」の看取りと遠藤周作の『深い河』を臨床心理学的に考える」、於：京都文教大学
- 平成25年 2月 同志社高等学校教職員研修教育講演「発達障害への理解と特別支援教育について」、於：同志社高等学校会議室
- 平成25年 9月 公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構 学術交流センター平成25年度「ひょうご講座2013」講師、「イメージを通じて、心の奥( 無意識の世界 ) を探る」、於：兵庫県民会館

( その他 )

- 平成14年 5月 1. 同志社高等学校 スクールカウンセラー「現在に至る」  
2. 平井クリニック( 精神科 ) 臨床心理士「平23.3まで」
- 平成18年10月 株式会社オリックス 心理カウンセラー「現在に至る」
- 平成19年 1月 阪本病院 心理カウンセラー「現在に至る」
- 平成21年 5月 「ターミナルケアからみた『死』と『生』 『死』があるからこそ『生』があり、『生』があるからこそ『死』がある」( 京都文教公開講座「死からみた生の輝き」 )、於：京都文教大学
- 平成22年 1月 京都文教大学人間学研究所主催耳学問榎島亭vol.10「愛猫トムと三島由紀夫と私」、於：京都文教大学
- 平成23年 3月 2010年度京都文教大学春期オープンキャンパス講演「童話『100万回生きたねこ』から読みとく臨床心理学について・パート1」、於：京都文教大学
- 平成25年 8月 2013年度京都文教大学夏期オープンキャンパス講演「童話『100万回生きたねこ』から読みとく臨床心理学について・パート2」、於：京都文教大学
- 平成25年10月 社会医療法人 愛仁会高槻病院 精神神経科 部長・杉林稔先生企画院内講演会講師、「終末期医療におけるヌミノース体験の意味と理解について」、於：高槻病院会議室

平成二十一〜二十五(2009〜2013)年度の社会における活動